終わらない「金の戦争」

―近年における「金嬉老事件」の文化的専有をめぐって―

Kim's War without End：
On Recent Cultural Appropriations of *Kimhiro Incident*

鄭　鎬碩*
Hoseok Jeong

1．はじめに：「冬のスマタ」

「寸又峡温泉1泊の旅　冬のスマタ」（図1）

図 1：ツアー「冬のスマタ」広報印刷物（2004 年）

図2：ドラマ『冬のソナタ』日本語版（DVD BOX1）(2003年)

「韓流ブーム」を呼び起こした韓国ドラマ『冬のソナタ』（図2）を弄ったネーミングが目を引くこのツアーは、静岡県南アルプスを走る大井川鉄道と温泉街寸又峡の宿とが手を組んで2004年以来毎年冬に販売している旅行商品である。ところが、「寸又峡事件」あるいは

*東京大学大学院情報学環

キーワード：金嬉老事件、文化的専有、社会的媒介、サブカルチャー、反権力、昭和ブーム、民族問題。

「金嬉老事件」と知られる一連の出来事、とりわけその背景を知っている人々にとって、このツアー名はある種の当惑感を呼び起こすにちがいない。

というのも、「冬のスマタ」より連想される二つの文化的記憶、すなわち、1968年の「寸又峡（スマタキョウ）事件」と2000年代の「冬のソナタ」は、たがいに融解されないまま併置され、ある種の「不協和音」を作りだしているからである。

「冬のスマタ」は、純愛を語るメロドラマや主人公の韓国俳優にたいする大衆的人気を引用しているはずだが、そこから、40数年前「ライフル魔」と呼ばれた一人の武装した男による朝鮮人差別の訴えという生々しい現実の「険しさ」は完全に払拭されない。そもそも、「南アルプスの登山口にあたる奥深い山中に、こうした温泉場があることを知る人は、全国的規模でいうと皆無にひとし」（本田 1982：194）く、寸又峡温泉の存在が日本中に知れわたり一躍観光地として浮上したのは、事件の「おかげ」である。その寸又峡が、今「昭和ブーム」「SL（蒸気機関車）ブーム」「韓流」などを背景とし、「冬のスマタ：車窓に響く懐かしい汽笛と温泉の旅 」というキャッチフレーズで生まれかわろうとしているのである。

ここで私たちが直面させられるのは、ある歴史的事件にまとわれる文化的記憶の生命力と、その事件が事後的に媒介され新たなコンテキストに置かれるという強力な文化的専有力との緊張である。さらに、すべての文化的記憶が、社会的媒介（メディエーション）のなかで再生産と意味変容の契機に開かれるという見知からすれば、「冬のスマタ」でよみとられるのは、「寸又峡」や「金嬉老事件」の意味をめぐるある種の「せめぎあい」にほかならない。

本稿では、1968年に起こった「金嬉老事件」が今日においてもまださまざまな意味変容を遂げて行く現象を、出来事の文化的流用＝専有（appropriation）の例としてとりあげ、「過去」の媒介における意味の生産と消費にまつわる文化的ロジックについて考えていきたい。

2．「開かれた事件」をどうとらえるか

2.1　終わらない「金嬉老事件」

「金嬉老事件」（以下、文脈によって「事件」と略す）とは何か。1968年2月20日、在日コリアン2世の金嬉老（キムヒロ；キムキロ[1]、以下、文脈によって「金」と略す。当時39歳）は、静岡県清水市（現・静岡市清水区）のクラブで暴力団員2人を射殺し、翌日、同県榛原郡本川根町（現・榛原郡川根本町）寸又峡温泉の旅館で経営者の家族と宿泊客の13名を「人質」[2]として立てこもる。ライフル銃とダイナマイトで武装した金は、約88時間にわたる警察との対置のなかで、自分が経験した差別的な扱いを訴え、特に日本人刑事による蔑視発言にたいするテレビでの公開謝罪を求める。こうした彼の行動は、マス・メディアを通じて

大々的に報道され、瞬時に全国的な注目を浴びることとなった。これが、今日までも「戦後史に残る劇場型犯罪」[3]として記憶されている金嬉老事件の発端である。

この「事件」に対する言及は、公判資料や国会議事録などの公的文書、ジャーナリスティックな記事やルポ、興味本位の読み物、個人的回想など数えきれないほど多く散在しており、その膨大さと多様さは、多岐にわたる反響を引き起こした同事件の波及力の大きさと社会史的重要性を示唆している。とりわけ興味深いのは、関連言説の生産と消費が現在まで活発に続いている点である。事件にたいする関心は、その勢いが衰えたかと思えば再び活発化し、事件はその都度以前とは若干、もしくは全く異なる意味を帯びて登場してくる。図書、新聞報道・雑誌記事、レンタルDVD、インターネット・コミュニティの書き込みや個人ブログ、ウェブ動画など、2000年以後に新しく出た各種の関連コンテンツは少なくないのである。1968年の事件が今まで語られ続けているという一見不思議な現象をわれわれはどう捉えればいいのか。

2.2　4つの「事件」

金嬉老事件が1968年発生以後持続的に世間の関心を浴びてきた背景には、金の逮捕後、公判が7年間と続き、彼を弁護する活動が思想運動・社会運動として現れたこと、そして2000年代まで彼自身による、もしくは彼を巻き込む数々のセンセーショナルな事件が勃発しつづけたことなどがある。ただ、ここで問われているのは、事件が40年以上にわたってさまざまな言説とイメージをとおして媒介された理由ではなく、そのなかでなされてきた意味変容、そのものであるからである。事件の意味が再生産もしくは再構築される「現場」では、多種の権力関係や文化的ロジックが働き、そうした特定の歴史的条件のなかで個々人や集団の利益と熱望、そして未来に向けた希望さえもが託されてきたといえる。この軌跡を検討することは極めて大きな作業となるため、本稿では近年における一部の風景だけをとりあげるが、議論に入る前にまず「事件」を時系列に4つの時期に分けてその大まかな流れを提示しておきたい。

（1）第1期　事件発生から逮捕まで（1968年2月）

金が寸又峡の旅館「ふじみや」で警察と対置しつつ「差別」を訴える様子が各種メディアによって集中的に報道され、またテレビで警察による「謝罪放送」が行われる。金、記者、警察の間で、逮捕作戦、自首交渉、取材競争などさまざまな戦略的行為が交差し、複雑な対立と共犯関係が絡み合うなか、金自身がテレビ・ワイドショーに電話生出演し、記者を呼び入れて何回も行われた「記者会見」、記者の要求による銃撃シーンの演出などが放映されると、手紙、電報、説得志願者などが殺到し、全国から多様な反応が引き起こされる。

新聞と放送では、「ライフル魔の恐怖」というフレームと「気持ちは分かるが方法が悪い」という論調が支配的であったが、他方、金の「行動」の裏面にある生い立ちと生活状況が注目されるにつれ、在日朝鮮人の「過去」や差別問題も取りあげられはじめる。多くの場合、「金嬉老事

件」とは、取材記者に紛れ接近した警察官（と記者たちの協力）によって金が逮捕されるまでのこの一連の出来事を指す。

（２）第２期「金嬉老公判対策委員会」の活動、韓国における釈放運動（1968年3月～1975年11月）

金の訴えに応答し、その意味を追究しようとする大学教授やジャーナリストなど「文化人」たちの対応が現れる。そのなかで「金嬉老公判対策委員会」は、裁判が単なる刑事事件として処理されてしまうことに抗し、７年に及ぶ法廷闘争と研究、出版、学術シンポジウム・集会・デモの組織、他の運動団体との連携などさまざまな言論活動を通して、金の叫んだ「民族問題」という言葉を「公論」として提起する。一方、韓国では、事件の反日ナショナリズム的解釈が現れるなか、大規模の署名運動などが行われ、日本での動きに歩調を合わせる「共闘」の動きも登場する。金は1975年最高裁で無期懲役の判決が確定したが、韓国では宗教団体の支援のもと大規模の釈放運動・請願運動が展開される。

この期間にも、包丁、ヤスリ、粉末などが差し入れられた「凶器差し入れ事件」やそれと関連した看守の自殺（1970年3月～4月）、刑務所の処遇に抗議して行われた金の自傷騒動（1971年4月）、金の韓国女性と獄中結婚（1971年12月）など、金は引き続きメディアの注目を浴びた。

（３）第３期　「帰国」と事件（1999年～2000年）

比較的に報道や引用の少なかった長い服役期間を経て、1999年9月7日、金が31年6ヶ月間の収監生活の末に仮釈放され韓国に送還されると、再びメディアの報道が急増し、過去をふりかえる記事や番組が多くなる。韓国においては「金嬉老ブーム」と呼ばれるほどの歓迎ムードが形成され、取材競争や手記の版権確保競争が起きる。一部では「日本の民族差別と闘った英雄」との受け止め方も現れる。大手放送3社は、金が各地を訪問し講演会などを行う様子などを連日報道し、それぞれ特別ドキュメンタリー番組を編成する。1992年に劇場公開された映画『金の戦争』も再放送される。

しかし、2000年、妻が現金や預金通帳などを家から持ち出したまま行方不明になる事件や、金（当時71歳）が内縁関係にある女性の夫を竹やりで脅し、部屋に火をつけるなどで逮捕される事件が相次ぎ、２が月後から韓国全国、日本、アメリカで巡回公演の予定を立てていたミュージカル『朝鮮人・権禧老』（全州市立劇団）は企画中止となる。

（４）第４期　現在（2001年～現在）

懲役2年6ヶ月を言渡され、治療監護所（医療刑務所）に収容された金が2003年に出所すると、日韓両国のメディアにより、さらに多様な文脈で登場するようになる。最近には、日本人観光客が多数死亡し国際問題となった韓国釜山の射撃場火災事件と関連し、金が射撃場の常連客であったこと（2009年11月）や、日本への再入国を希望していることをめぐる報道（2010年2月）が目立つ。その直後の金の死亡（2010年3月26日）により、再び関連記事が増

えている。

このような40年以上におよぶ複雑な経緯を念頭におきつつ、以下では「第４期」のみをとりあげ検討の対象としたい。

2.3　媒介による専有、シティズンシップの変容における非市民のエージェンシー

以上から示唆されるのは、金嬉老事件がすでに完了した過去の出来事であるよりは、時代ごとに理解しなおされる「開かれたもの」であるという点だ。本稿は「専有」（=流用、appropriation）という概念によって、こうした「開かれた事件」を捉えることを試みるが、これは、以下の両点を視野に入れるためである。

第一に、意味の生産と消費に介入し、意味の再生産と変容を引き起こす具体的な実践の契機としての「媒介行為」と「媒体」（メディア）である。

専有とは、ある記号が異なるコンテキストに置かれることによって意味や記号の作動様式が変容することである。この概念は、人文科社会科学全般において、異なる社会的状況における文化内容の土着化、意味の変異、再解釈、文化翻訳の諸現象（Lull 2000, Tomlinson 1991）を捉えるために広く用いられる。とりわけ近年においては、発話者の意図や当初の文脈から離れた記号の作動に着目した脱構築主義的議論（Derrida [1972] 1999）に触発された、反復的「引用による遂行」（performativity through citation）における意味の変容が転覆的な効果をもたらしうるという点が強調された（Butler 1993：191）（Spivak and Butler 2007）[4]。

ある歴史的出来事の社会的内実としての「事件の意味」は、その発生と同時に異なる文脈（コンテキスト）に向けて開かれる。これを可能にするのが、報道、引用、翻訳など、事件の伝達と流通にたずさわる多様な「媒介」の活動である。換言すれば、社会的媒介（少なくても記号を用いるすべてのコミュニケーション行為）は、つねに出来事の意味を事後的に変容させる専有的な文化実践なのである[5]。

ここで明らかになるのは、媒介による意味の再生産と変容が必ずメディアの諸問題との関連で検討されなければならないという点である。特定の専有活動を理解するためには、それが行われる当時のイデオロギー的編成にかんする意味論のみならず、その媒介活動を支える技術的条件と空間論的な諸問題を問う必要がある。とりわけ、それが変革に向けられた企てであれば、使用可用な言説資源の潜在性と現動化（actualization）だけでなく、そこで用いられるメディアそれぞれの物質性と経路依存性、空間的配置と身体的経験を条件づけるテクノロジー、ジャンル的文法と文化的伝統など、媒介方法の問題が重要となる。

これは、金嬉老事件の専有の検討において、意味の変容（transformation）や亀裂（disjuncture）並びに、少なくとも専有の実践が試みられている「場所」と、そこで用いられる「媒体」を確認しておかなければならないことを示唆する[6]。

第二に、公式的な政治的媒体（制度）から排除され、「政治的境界線」の外部に置かれた「非市民」（non-citizen）の行動が、シティズンシップ（市民権／市民性）や公共性と結ぶ関

係である。

金嬉老事件は、「非市民によるシティズンシップの行為」（non-citizen's act of citizenship）が事後的、文化的専有の実践のなかでどのような軌跡を示すのかという極めて興味深い事例である。彼の行動は、既定の行為（action）の分析カテゴリーに収まりきれない複雑性を帯びた演劇的、遂行的な行動（act）として、当時日本のナショナルな共同性の想像的境界や市民性に影響を与えた。これは、既存のシティズンシップ・レジームを再生産する慣行／実践（practice）の新たな専有可能性を孕む文化領域の戦略的位置を浮かび上がらせると同時に、旧植民地出身者の子孫、外国人が、複合的な媒介過程をとうして予見しがたい波及力と「エージェンシー」の問題を提起する。ここに、事後的に行われ、ある「事件」の意味が持つ政治的効果に変化をもたらす専有の実践との関連が問われる。

以下では、こうした「専有」概念によって提起される二つの論点を念頭に置きつつ、近年における金嬉老事件の文化的専有の様子を検討していきたい。これは、事件を既定内容の伝達（transmission）とその効果ではなく、遠隔通信（tele-communication）に伴う媒介や人々の働きかけによって初めてその意味が構築され、また変容されていく「開かれた過程」、脱構築的にいえば、回収不可能で散種的（disseminative）なプロセス[7]として捉え、本事件の戦後日本における社会史的意味を探るより大きな作業の一部である。

3．「反権力」としての「金嬉老事件」

3.1　抽象化されていく「反権力」のシンボル

近年における事件の語られ方に最も著しい一つの傾向は、金の言動を「権力への抵抗」と捉え、金をそのシンボル、つまり「反権力のヒーロー」として位置づけることである。権力と対決する反乱者の物語はさまざまなコンテキストにおいて適応されるモデュールとして用いられやすく、金嬉老は、ドラマ、映画、演劇など多様なジャンル的横断のなかで「反英雄」として姿を現すようになった。

ただ、ここで留意しなければならないことは、事件を「権力にたいする対抗」ととらえる視覚が事件当時から一傾向として存在してきた点である。1960年代後半は、安保闘争以来「日本の国家」もしくは既定の「システム」における「さまざまな抑圧要素を問題化し、『権力』から自立した意識空間、文化内容を創出しようとするさまざまな動き」（『ニュース』23-3）が全景化していた。『金嬉老公判対策委員会ニュース』の読者欄「委員会通信」へ寄せられた多くのメッセージは、「反権力としての金嬉老事件」という視角が60年代の政治社会的状況との関連で持っていた強い現実性を証明している。

ただ当時は、事件を「反権力闘争」として捉える立場があったものの、それは「民族的責任」を果たすことを強調するもう一つの観

点によって常に相対化されており、その緊張関係のなかで「事件の意味」が論じられていた（『ニュース』 7：7-13、10：2-13、14：16-19）。

たとえば、事件の翌年に開かれた二度にわたるシンポジウム「金嬉老事件から一年」（1969年2月21日、6月28日）では、事件を「日本人の責任の問題」としてとらえる立場と「反権力の問題から入ってゆくべきだという二つの考え方」が提示され、活発な討論が行われていた（『ニュース』10：2-13）。そこでは、金の警察との対決を東大闘争と同じような反権力闘争とみなすべきか、その場合「民族的差別」という論点はどのように位置づけられるのか、旅館での金と「人質」たちの間の関係をある種の「コミューン」としてとらえることができるのか（『ニュース』7：10）、朝鮮人の考える「反権力」と日本人が考える「反権力」は同じものなのかなどの論点が出されている。その後にも、金を「同志」と規定する「反権力論」をめぐって、非抑圧者（在日朝鮮人）と抑圧者（日本人）との「連帯」は可能なのか、「金嬉老の持っている対警察権力斗争（ママ）へのエネルギーに対する共感と戦術上の教訓が引き出されるところで忘却されてしまう彼の「在日朝鮮人という存在条件」をどう視野に入れて考えるかが問われ、議論されていく（『ニュース』16：16-19）。

一方、具体的な政治現実と切り離された抽象的な「権力への対抗」として事件が理解されうる可能性を示したのは、金の逮捕直後に作家福田恆存によって書かれ、2000年代に再び上演される戯曲『解ってたまるか』である[8]。この作品は明らかに事件の設定―ホテルに立てこもった「ライフル魔」、自分の犯した殺人の正当化、警察との対置、報道陣との交渉など―をそのまま演劇に仕立てている。ところが、場所をアメリカ大使館付近と変えることで、これが「あの事件」をモデルにしたことは誰でも分かるが、本来の事件にまとわれている「在日朝鮮人問題」や「民族差別」などは一切顧慮しなくてもいい新たな解釈学的空間が作り出され、権力に対抗する主人公をめぐる様々な人物群の行態だけがブラックコメディー的に描き出されている。

3.2 「金嬉老」のサブカルチャー的再配置：裏社会、Vシネマ、精力剤

「反権力のヒーロー」としての金嬉老は、レンタルDVDショップやコンビニの成人雑誌のコーナーでも遭遇することができる。

2004年、金に関する映像ドキュメンタリーDVDが3枚リリーズされ、レンタルショップに並べられた。そのうち『金嬉老（2）無期懲役拘禁52年』（GPミュージアムソフト、2004年、49分）（図3）では、熊本刑務所で金と同囚生活を経験した元暴力団員とのインタービューなどから、金が刑務所のなかで、いかにして「権力」に対抗しつづけたのか語られる。

ただ、印象的なのは映像の「内容」ではなく、むしろその「位置」である。まず、この作品が入っているシリーズ『実録 プロジェクト893XX』の他のタイトルに、「四国ヤクザ戦場の主役たち」、「沖縄抗争編」、「THE

ドラッグ DRUG・薬物との闘い」、「THE GANG（ギャング）」「女子刑務所」などとあるが（図4）、ここで「事件」は、その宣伝文にあるように「昭和の大事件、ヤクザ抗争、薬物問題などをリアルに描いた10作品」の一つとして位置づけられている。これらの作品は、劇場では公開せず、ビデオ（DVD）商品用として製作された、いわゆる「Vシネマ」として位置づけられており、上述した映像に出演して刑務所内の金を語る人々も、ヤクザ映画や「Vシネマ」の主役モデルになった暴力団の大物組長や幹部などである。

その後発売された『実録・ドキュメント893[反社会的組織～暴力団の実像～]（2007年）や『金嬉老 最後の証言』（2009年）、そして、いわゆる「実話誌」と分類される雑誌『漫画実話ナックルズ』における記事、2000年以後金の書いた手記を連載した『実話時報』（竹書房）、そして『金嬉老半生記』を執筆中だという過激な作風の漫画家根元敬の本やインタービューにおける言及、事件関連資料目録が掲載されたウェブ・ページにおける扱われ方など、事件のサブカルチャー的な再配置（relocation）を物語る資料は他にも多い。このように、今日の金は、「ヤクザ物」、「エロス物」、「怪事件」など、いわゆる「裏社会」の一要素としても消費されるのである。

しかしここでも、ある亀裂が指摘できる。そもそも金は、暴力団員の不正な返済要求の脅威に憤慨して2人の暴力団員を射殺した。公判では、その直接的な原因となった「手形」をめぐる複雑な事実関係が検証され、地域社会における暴力団と下層民衆及び在日朝鮮人との関係、とりわけそこにおける「加害―被害、抑圧―被抑圧の複雑に交錯した重層構造」（『ニュース』22：28）が明らかになった。1970年代ま

図3：DVD『実録 プロジェクト893XX　金嬉老（2）無期懲役　拘禁52年』（2004年）

図4：『実録 プロジェクト893XX』シリーズ広報物

で金の行動が、暴力団との対立関係として語られることが多かったのはこのためである。ところが、以上の事例のように、今日の「金嬉老」は、既定秩序に反抗する「アウトロー」として暴力団と同列に並べられるようになる。

さらに、2000年の内縁関係の発覚と殺人未遂事件以来、週刊誌のゴシップ欄に再び頻出するようになった金は、「華麗な女性遍歴」や「精力剤の広告」などと関連して言及された。2000年1月号『週刊現代』の「独占告白 金嬉老・71歳『私を勃たせた"韓国版バイアグラ"の威力』」や、同年4月号『週刊新潮』「韓国版バイアグラの広告塔になる「金嬉老」の頑張り」、同誌9月号の「金嬉老を狂気乱舞させた韓国版バイアグラ」[10]がそれである。これらの記事タイトルの一部は、都内を走る電車の中吊り広告に現れ人々の注目を浴びた。

このように、金の「反権力性」が性的エネルギーと結びつけられたり、性欲によって「堕落した英雄」というフレームが現れたのである[11]。

3.3 「柳の戦争」：韓国の政治言説における「金嬉老」

2009年、韓国のインターネット新聞『プレシアン』には、「柳仁村の戦争―誰のためのものなのか」というタイトルのコラムが掲載された。これは、当時の韓国文化体育観光部長官であった柳仁村（ユ・インチョン）が、就任以後「文化芸術と言論をはじめとする領域全般にわたる政治的目的の監査と報復性人事、天下り」を繰り返し、国立韓国芸術総合学校に対して前例のない監査を実施するなど一方的な「保守改革」を進めていたことに対する教育専門家からの批判記事であった[12]。ただ、ここで意図的に「戦争」という表現が用いられたのは、柳長官がかつて「事件」を描いた映画『金の戦争』で主人公金嬉老を演じた俳優だからである。このタイトルは、金に扮して権力に対抗する姿を演じた柳長官が、今は大統領の政治路線に同調し、「左派剔抉」の政治闘争を行うという皮肉さを揶揄するものである。

ほぼ同時期から、インターネット上では類似した内容のブログ記事や書き込みが多数見られるようになった[13]。その中には、映画『金の戦争』のポスター（図5）をいじった政治パロディー画像もある（図6）。これは、インターネットのポータル・サイトやコミュニティ・サイトを中心に人気を集めた[14]。

2008年10月国政監査の途中、柳長官は、野党議員の「李明博（イ・ミョンバク）の手下」という言葉に腹を立て、カメラを向けた記者に対して暴言を浴びせた。その様子がテレビやインターネットに公開されて話題となったことが、この合成画像（図6）が作られた背景である。オリジナル・ポスターにおける「金嬉老の人間宣言―誰にも自分の生まれた土地で暮らせる権利はある」というキャッチフレーズは、「柳仁村の人間宣言―誰にも自分の口で話す権利がある」に、映画館名は「国会劇場」に、そして「日本列島を揺るがした一発の銃声」は「大韓民国を揺るがした一言―撮るなXX！」に変わっている。そして金嬉老＝柳仁村の手には、ライフルのかわりに拡声器が握られている。

韓国におけるインターネット・コミュニティの活動は、それが2004年盧武鉉大統領弾劾訴追反対デモを主導した以来さらに成長し、政治文化に大きな影響力を与える要素となってきたが、映画や広告の画像・動画に政治家の顔写真や他の動画を合成し文言や音声を改変する政治パロディーが人気を浴び、注目されてきた。

こうしたパロディーにはしばしば、引用されるイメージの乱用や誤用の試みがみられ、その意味の歴史性と政治性が微妙に変えられる。以上の例では、柳長官の「権力欲」との対比によって、「金嬉老」の帯びている（と認識されている）「権力にたいする抵抗」という意味とその現在的適応性（modulability）が一層強化される。柳長官が、すぐれた俳優として金嬉老を見事に演じたことで受賞されたこともあり、また数々の失言や李大統領への「過剰忠誠」と関連して在任中インターネット上で揶揄されつづけただけに、金嬉老のペルソナとのコントラストは政治的効果を高めた。

以上見てきたように、「金嬉老事件」＝「反権力」という理解の枠組みは、当初は「民族責任論」との対比によって鮮明な意味が与えられていたが、次第に、異なる脈絡で引用可能な抽象的シンボルとして専有され、反文化・下位文化的メディア商品として編成されたり、さらには究極的な反社会性ともいえる性的エネルギーにまで接続される。一方、韓国の例で見るように、映画をとうして一回専有された「権力への抵抗者」という金のイメージは、政治家の権力欲に対する揶揄として再引用され、現実政治的磁場の中で新たな役割を与えられたのである。

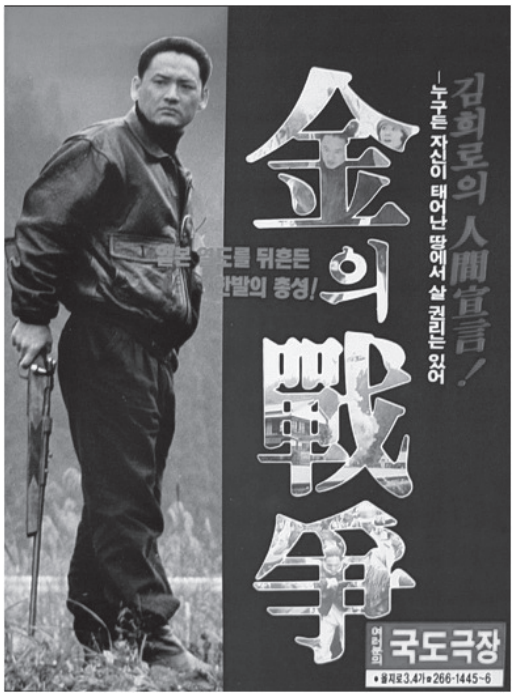

図 5：映画『金の戦争』の公式ポスター（1992 年）

図 6：映画『金の戦争』の公式ポスターを改変した合成画像『柳の戦争』（2008 年）

4．事件の想起と共同性の換気

4.1　「金嬉老事件」と「昭和」

近年における「金嬉老事件」の文化的専有に見られるもう一つの特徴として、それがとりわけ「昭和」を回想する場面において頻繁に言及されるという傾向を挙げることができる。金事件が「昭和43年」に起きたことは間違いない事実である。ところが、それを他ならぬ「昭和の大事件」として位置づけようとする社会文化的「磁力」が働くのであれば、それはむしろ解明されなければならない事柄になる。

2011年雑誌『中央公論』が企画した座談会には、「力石徹の死、よど号ハイジャック、金嬉老事件…… 『あしたのジョー』とあの時代」というタイトルがつけられた[15]。同じく代表的な総合雑誌である『文芸春秋』のシリーズ記事「空前の大アンケート 証言「日本の黄金時代 1964-74」--各界著名人332名 衝撃の記憶」でも、金嬉老事件は、「三億円事件」「札幌医大心臓移植」「川端康成ノーベル賞」「パリ五月革命」「ハレンチ学園」などとともに、あの「モーレツ時代」を回想するとき欠かせない事件とされている[16]。これは、書店だけでなくコンビニエンス・ストアによく並べられる、福永良子（2005）、歴史の謎を探る会編（2006）など「昭和」にかんする大衆的歴史書においても同様である。

一方、2008年頃以後、有名人の自叙伝ではなく、平凡に暮らしてきた人々が自身の生涯を書き綴るという、いわゆる「自分史ブーム」が起こったが、その一形態である書き込み式「自分史ノート」でも、金嬉老事件は、60年代、あるいは、68年代を回想するための代表的なキーワードとして必ず用いられている。

たとえば、その代表的なものの、1968年のノート・ページを見ると、「歳」「在住」「在学・勤務」などを書き込む欄が設けられ、当時を思い出しやすくするために、1968年度起きた主な出来事や流行したものを紹介している（新人物往来社編2010：142）（福永 2005：93）。読者（＝書き手）は、佐世保へのエンタープライズ入港、金嬉老事件、東大闘争の並びに、「竜馬がゆく」「あしたのジョー」「神々の深き欲望」「俺たちに明日はない」「卒業」「花の首飾り」「恋の季節」「ミディー」「マキン」「サイケ」「ゲバ」「大衆団交」「男はつらいよ」「ゲゲゲの鬼太郎」「大きいことはいいことだ、出前一丁」など、小説、映画、漫画、歌、流行語、CMなど各種文化商品からなる「懐かしいキーワード」を読みながら「あの頃の自分」についての記憶を蘇らせ、与えられた文化的体験の範型のなかで自分自身を重ねる。こうした「自分史」の著述は、同じ「サブノート」を手にとって過去を回想しているはずの大勢の人々を想像する「共同体の再想像」というべき作業となる。ここで、「金嬉老事件」は、時代と年度を特定するための代表的標識として召還されているのである。

大きな衝撃を与えたトラウマ的な出来事の大半がそうであるように、出来事は固定的な

「記憶」（memory）として保存されるのではなく、新たな文化的な布置のなかで想起（remember）されることによってその都度更新されていく。過去は、それを想起するメディア経験が、どのような政治状況のなかで、どのような場所で、そしてどのような方法で行われるかによって、異なる再構築の道を歩むことになるといえる（Harvey 1979, Morris-Suzuki 2004）。こう考えたとき、以上から指摘できるのは、風化しつつある「事件」の記憶を蘇らせようとすると同時に、それをすでに終わった過去として「処理」あるいは「消費」しようとする二重的な磁場であり、そこで有効な「時間メディア」として機能している「昭和」という時代の区切り方である。以上の例からは、「昭和」の専有と「金嬉老」の専有が接合し、「事件」が改めて想起（remember）されると同時に「昭和」という過去に編入され、ある種の共有された記憶（shared memory）となっていくことが示唆されるといえよう。

4.2 「金嬉老記念館」と「冬のスマタ」：金嬉老事件の商業的専有

「事件」が「昭和」というナショナルな記憶に編入されていくことを背景とし、事件の舞台であった旅館は、ある商業的専有を試みた。2005年「籠城鍋」や「金嬉老煎餅」の販売を検討していることが報じられ[17]、2010年5月からは館内に資料館を設け、一般に有料公開したのである[18]。冒頭で言及した「冬のスマタ」のキャンペーンは、資料館のオープンと同時に展開されたものである。

ただ、以上の分析から言えるのは、金嬉老事件の記憶は、その近年の昭和ブームで消費されている「懐かしき平穏な時代」としてのイメージと相容れないものであるだけでなく、新たに試みられた『冬ソナ』のメロドラマ的な軽さとも衝突する。さらに、「冬のスマタ」は、金嬉老の訴えた「朝鮮人への公然たる軽蔑」と、「韓国人であるヨン様への憧れ」との短絡、つまり両者をつなぐ何らかの滑らかな市民権発展の歴史や朝鮮人にたいするイメージの向上などがないという点を指摘しておきたい。要するに、「冬のスマタ」に漂っている奇妙な違和感は、事件の商業的専有の試みから読みとられるこうした亀裂に起因するものであり、ここでは戦後日本におけるシティズンシップ（市民権・市民性）の歴史が問われていることが分かる。

5．再び「民族問題」へ

5.1 「民族問題」としての「金嬉老事件」

「民族問題」とは、1968年事件当初、金が「朝鮮民族にたいする差別」を自身の行動の原因として訴えたとき用いた言葉であった。それが、彼の行動に触発された知識人たちの言説活動によって、「抑圧者としての日本人の連帯責任と在日朝鮮人問題を含めた日韓両国の未来に向けた意味合い」として練り上げられ、より明確かつ広い意味を得た経緯がある。近年におい

て、事件が再びこうした「民族問題」というべき文脈において頻繁に登場するようになったのは、1999年金の仮釈放と韓国への送還の時からである。

たとえば、NHKでは、金の「帰国」を韓国や在日朝鮮人・韓国人コミュニティがどのように受け止めているのかなどについての特集番組『NHK　ETV特集　金嬉老事件から31年』（1999年9月16日）が編成され、インタービューと討論が行われた。

> つまり自分たちは日本人ではない。こういう来歴をもっている。それを認めてほしい。で、それを認める限りにおいて、たとえマイノリティであっても、この社会のメンバーである。で、それを頭から否定されたときの人間というのはいびつにならざるをえない。自滅的アピールという形でしか表現できない時代があったし、そういう状況から三十年、はたして日本の社会はそういうものを受け止めていく社会に今後なりうるのか、なりえないのか（下略）（コメンテーター姜尚中の発言）。

以上の発言でみられるように、金の送還により「過去」となった31年前の事件は、「現在」の社会状況を問うための題材として位置づけなおされている。

こうした傾向は、その後にも続いている。最近放映されたドキュメンタリ番組『報道発ドキュメンタリ宣言―金嬉老事件40年目の真相』（2008年11月24日、テレビ朝日）は、金の「民族差別の告発」というメッセージに再び光を当てる内容となった[19]。

さらには、下記の発言で見られるように、事件は、日本だけでなく、在日朝鮮人・韓国人コミュニティや韓国社会の閉鎖性と排外性を指摘する文脈で引用されることもあった。

> 金嬉老さんの韓国語を聞いたことがありますか。私はテレビを見てこれはだめだと思った。あの人の韓国語では絶対韓国では通じない。（中略）彼は二世で、日本で生まれたのです。韓国人だから韓国に帰って幸せだなんてとんでもない話です。金嬉老さんは韓国からも日本からも在日からも捨てられた存在だったのです。あれは在日が受け止めなければいけなかった。でも、金嬉老さんを受け止めたら、次にまた金嬉老さんと同じ朝鮮人ということで差別されることを恐れた朝鮮人は彼を捨てたのです。いま、現実に六世まで生まれているというのです。六世までを外国人として扱う国は世界で日本だけです。二重国籍も認めない。生地主義でもない。帰化の基準が明確でない。なおかつ植民地にした地域の出身者に対しそれをやっているというのは日本だけです。（下略）[20]

他方、こうした論調を批判する保守的な「在日論」において、金嬉老をどう捉えるかは、一つの重要なバロメーターとなっている。鄭大均は、「金氏を生み出した構造は残ったまま」[21]と要約される、朝鮮・韓国系知識人たちの間ではある程度共有されている評価を真っ向から否定し、「犯罪者が美化されている」（鄭2004：

193）などと強く批判しながら、そうした発言をした知識人たちに対する攻撃を行っている。

このように、まだ日本社会において在日韓国人・朝鮮人の市民的権利や社会的処遇が未解決の余地を大いに残しており、その上、いわゆる「ニューカマー」の増大という背景も含めて、文化的に同化しつつも日本国籍を持たずに暮らす日本生まれの「在日外国人」の人格形成の問題や、これらの現実で浮上する朝鮮学校や地方参政権をめぐる論争などが現在進行中であるだけに、金嬉老事件の文化的専有において「民族問題」が抹消されることは難しいと思われる。

5.2　60年代の総括と「金嬉老事件」の社会史的位置づけ

「金嬉老事件」は、近年活発化した、1968年や60年代を回顧・評価する論壇の動向[22]を背景とし、当時の言説空間において朝鮮問題、在日朝鮮人の問題が公論として台頭する直接的契機としても、その意味が改められている。

金の公判闘争にかかわりながら在日朝鮮人問題について積極的な発言を展開した鈴木道彦は、2007年出版した『越境の時　一九六〇年代と在日』で自身の思想と活動を述懐しつつ、次のように書いている。

> 私が目を通した限りでの六十年代にかんする著作や回想記には、一般に民族問題がほとんど扱われていないうえに、ごく一部を除いて「民族責任論」を取りあげたものもない。逆にこの主張は一九七〇年以後に初めて提唱された、という記述も見かけられるくらいだ（鈴木 2007：23）

鈴木は、近年の「60年代論」における「歪み」を証明するように、事件に触発された彼自身を含めた知識人たちの対応を、「金嬉老公判対策委員会」の多様な言論活動および、それと接続した市民たちの文化運動から鮮明に描きだしている。そこで明なになるのは、「過去植民地支配の遺産としての在日朝鮮人にたいしてどのように向きあうべきかという民族問題」を公的な論題として構築していくという、金嬉老事件の思想的専有をめぐる苦闘の軌跡である。

これは、戦後の日本・韓国・在日をめぐる思想状況を論じながら尹（2008）が改めて評価しているように、もっぱら挿画的に「事件」を扱ってきたこれまでの議論を覆すだけでなく非常に重要な意義を持つように思われる。在日朝鮮人をはじめとする外国人の権利論の台頭による「戦後公共性の変容」を「日立闘争」が始まる1970年前後と措定してきた従来の傾向（加藤 2010）をも相対化するためである。

40年前提起された「民族問題としての事件」という視点は、こうした現在的作業において核心的位置を占めるものとして改めて思考されはじめている。

5.3　排外主義的専有：「行動する保守」と「ネット右翼」のみる「金嬉老」

一方、民族問題として事件をとりあげる「正反対の方角」からの動きもますます強くなっている。それは、朝鮮、韓国、在日朝鮮人にたいする攻撃の題材として、事件を用いる排外

主義、国粋主義的言説においてである。金は、保守的評論家によってしばしば非難されてきたが、近年いわゆる「行動する右翼」[23]と呼ばれる保守系団体の活動は、その最も著しい例であろう。

2010年2月、1999年に仮釈放され韓国に永住帰国した金が「死ぬ前に母親の墓参りをしたい」と日本への渡航を希望し、日本政府に入国を認めるよう要請しようとしていることが知られると[24]、「在日特権を許さない市民の会」（在特会）東京支部は、いくつかの類似した性向の協力団体に呼びかけ、法務省前でデモと街宣を行った。その呼びかけ文には、「日本人二名を射殺して旅館に立てこもった朝鮮人犯罪者金嬉老が日本への入国を求めて関係各所に働きかけております。（中略）ただでさえ在日特権によって犯罪に対する処遇が甘い（元）在日韓国人の更なる特権要求を絶対に認めないよう、法務省入国管理局に要請します」とされている[25]。

注目すべきは、こうした集会での街宣演説など、当日の様子が、動画共有サービスを利用して生中継され、「YouTube」や「ニコニコ動画」などを通じても配信されたことである。

そこでは、「殺人鬼金嬉老の入国を許可してしまうと、後に控えている犯罪者集団を日本入国許可するハメになってしまう。（中略）ドンドン犯罪者が日本に住みついてしまうことになるのである」など賛同者のコメントが加えられ、逐次的に掲示されていく応援メッセージや感想などの字幕が入れられた動画が電子掲示板や個人ブログを中心に流通される[26]。そして「金嬉老というどうしようもないクズ朝鮮人を英雄視するテレビ朝日」というような、金を扱った番組や韓国ドラマを放映するテレビ局にたいする攻撃と合体され、膨大な「ネット右翼」の言説を形成していく。

これは、近年いくつかの研究で示唆されたように、「在特会」の活動でみられるような、時には「行動」をもともなう「信条の表明」であるだけでなく、過激な政治的態度の表出によってその場を盛り上げ、コミュニケーションをつなげていくための単なる「ネタ」としての性格も持っている（北田 2005、鈴木 2005）。そして、しばしば指摘されるように、このインターネットを舞台とする排外主義的な意見の噴出現象には、若者たちの経済的困窮、日本の国際的地位低下、グローバル化と雇用流動化に伴う「不安」（高原 2006）など、社会経済的な諸要因が深くかかわっている。となると、「民族問題」としての金嬉老事件の専有は、「お茶の間を訪れた外国人犯罪者の恐怖」という1968年以来のパターンを繰り返しつつも、以前は存在しなかった新たな社会経済的要因との複合的な関連のなかでのみ理解できる。

こう考えると、今日における金嬉老事件の専有は、威嚇される共同性の防衛、もしくは、その開放や異質性の受容への要求という対立する両磁場の只中に置かれ、しかもその共同体の想像的境界の変容をめぐる諸要因の複雑化とともに、より複雑な「文化実践の政治学」を思考するよう求めている。

６．要約と検討：「金嬉老事件」の文化的専有から見えてくることと今後の課題

ここまで2000年以後に行われた「金嬉老事件」の文化的専有のメディア景観を検討し、そのいくつかの傾向を指摘してきた。

「事件」は、抽象的な反権力闘争のアイコンとしてサブカルチャーや性的エネルギーとの関連で消費され、韓国では民族主義的な色合いが加えられたうえで政治家による権力の専横や権力欲の批判に用いられた。一方では、「忘れられぬ昭和の大事件」として商業的な専有や、在日韓国人・朝鮮人や外国人の処遇と関連する日本社会の閉鎖性を指摘する文脈、それと対立する過激な排外主義的言説など、日本社会の共同性が再生産／変容される現場において絶えず引用されつづけている。なお、1960年代を総括する議論に「民族問題」を介入させ、事件を再提示する動きがあることも注目に値する。

それでは、冒頭で指摘した二つの論点の相互関係と関連し、以上の検討により明らかになった事柄は何であるか簡単に整理しておきたい。

（１）専有と媒介

金の行動は、戦後的アイデンティティの再構築、ナショナルな想像的な地平の形成に最も重要な役割を果たしたテレビという「お茶の間に持ち込まれた『劇場』」（吉見・水越2001：66）を「訴えの場」（court of appeal）（Giddens 1985=1999）としただけに、大きな衝撃と波及力を持ちえた。だが、その「衝撃」は、戦後的な国民／家族の共同性に対する再考を促すだけでなく、「他者からの恐怖」による反動としての共同性も生み出したはずである。

以上みてきた近年における専有の風景は、こうしたメッセージの効果とメディアの効果の交差が、事件の意味合いとその文化政治的役割の理解を左右する重要な論点となることを明らかにしている。つまり1968年の「メディアイベント」としての事件の経験は、今日さまざまな場面で回想され、「あの大騒ぎ」を一緒に経験したという共同性の産出につながったり、日本の閉鎖性を問うきっかけとなる。ただ、「事件」を多様な趣味的記号として消費させるメディア布置の産業的専有力によって示されるように、ここで必要なのは、こうした諸相を「共同性への／共同性に対抗する」という断線的な二分法に還元することよりも、専有の実践が提供する複合的な意味変容の潜在的可能性の幅を見極めつつ、現実的文化政治と連動される豊かな契機が生起してくる様子を繊細に捉えていく作業であろう。そのためには、インターネットを介した「事件」引用の急増によって全景化されつつある、インターネットと街頭、テレビとインターネットなどメディア間の相互参照関係（「間メディア性」）（遠藤 2004、北田2005）の効果にたいする検討が今後必要となろう。

（２）シティズンシップの歴史と非市民のエージェンシー

「冬のスマタ」という旅行商品、当初金と暴力団にあった対立関係を抹消する下位文化的な配置、金の「精力」への注目など、「金嬉老事件」の専有にみられるさまざまな意味のせめぎ

あいと亀裂は、これまで多くの政治的モデルによって説明されてきた市民権・市民性の変容における「他者」の位相が、漸進的で連続的な歴史的発展とはほど遠い「曲がりくねった軌跡」（crooked trajectory）のなかでしか捉えられないことを示唆する[27]。さらに、行為（deed）を安定的な行為者（doer）のイメージ（「英雄」「犯罪者」「犠牲者」）に還元する試みが必ず生み出す意味論的な決定不可能性は、連続的で整合的な市民権の「歴史」の成立を妨げる。こうした専有における意味論的剰余は、ある歴史的出来事の完全な専有の不可能性を示唆するが、またそこに、非市民の行動が予期しえない方式でシティズンシップの変容に変形力を行使しうる未知の可能性も潜められているといえる。だとすれば、「市民権・公共性の歴史的な変容における非市民の行動」という問いは、このように意味論的には捉えきれない専有の文化実践の現場において、メディアの空間論がどのように関わるのかという「専有―メディア」という論点を追究することによってのみ答えられるであろう。ここに、上述した二つの論点の関連が明らかになる。本稿は、この点を戦後日本という文脈において解明するうえで「金嬉老事件」の研究対象としての可能性を探索するものであった。ただ、ここでは「金嬉老」の現在的専有をめぐる見取り図を提示し、課題を浮かび上がらせることにとどまったため、今後の掘り下げが必要である。

註

1 金嬉老には８つの名前があり、これは被告の特定を難しくしたうえで公判において重要論点の一つとなる（『金嬉老公判対策委員会ニュース』第５号、6-8 頁）を参考。以下、同資料からの引用は「『ニュース』号数：頁」と略記する。

2 旅館で「人質」となった人々と金の関係性は、「脅迫罪」「監禁罪」の成立問題のみならず、事件そのものの性格の理解においてきわめて重要な争点となり多くの議論が加えられたため「人質」は引用符で記する。詳しくは、『ニュース』40、山本（1982）を参照。

3 『毎日新聞』2010 年 2 月 24 日

4 批評用語としての紹介としては、Sanders（2005）、他者性の専有にかんする美学的、解釈学的考察としては、Kristeva（1982）、Kearney（2002）を参照。

5 Roger Silverstone（1999=2003：174）は、メディアを、一連の制度、生産物、そして技術としてではなく、媒介作用（mediation）が行われる「プロセス」として考えることで、メディア経験の効果や利用、満足といった社会心理学的な文脈、あるいはメディアとオーディエンスの二項対立的構図の代わりに、日常的の社会的文脈においてメディアの媒介過程を位置づけ、「あるテキストから別のテキストへ、ある言説から別の言説へ、ある出来事から別の出来事へ」（Silverstone 2003：46）意味が「移動」することをとらえることを提案している。

6 こうした、ある出来事を「固定した事実」ではなく「開かれた意味の構築物」として捉えなおす視点によって明らかになるのは、本田の『私戦』に代表される既存研究における問題点であろう。すなわち、そこで堅持されている「客観的事実としての歴史的事件」と「マスコミによる不正な歪曲」の二分法だけでは、こうした意味の変容の奥行きと幅が捉えきれない。「真実と媒介」という従来の分け方を崩してしまった金嬉老事件では、「真実の歪曲」を批判し「権力に屈しないジャーナリズ」を強調することとは全く異なる平面における倫理性と政治的立場が問われているように思えるからである。すなわち、この問いは、テレビの普及と生中継の技術、全国的ニュース・ネットワークの成立を背景とし、集中的なメデイア報道によって事件そのものの本質が形成され、また、やがては日本人の民族的責任、在日朝鮮人の市民性や暴力性、マス・メディアと電波の公共性、銃器の管理監督など極めて多様な意味をめぐる実践と交渉が行われたこと、そして現在に続いてまでその意味が変容されつづけられていくところ

の文化政治をいかにして捉えうるかにかかっている。

7 トラウマ的な出来事の媒介にたいするデリダの脱構築主義的視覚については、「911 テロ」を分析した、Borradori, Derrida, & Habermas（2003=2004）を参照。

8 『解ってたまるか』は福田本人の演出により 1968 年 6 月に東京日比谷の日生劇場で初演され、その後「劇団昴」(1978 年)、「劇団四季」(2005 年、2007 年、2008 年) によって『解ってたまるか！』というタイトルで繰り返し上演された。その内容を収録した DVD（NHK エンタープライズ、138 分）は 2005 年に発売された。

9 金嬉老事件の資料を載せる個人運営ホームページの資料分類項目には、「いじめ問題」「冤罪」「オウム真理教」「グリコ・森永事件」「警察・警察官の手記・捜査関連」「刑務所」「酒鬼薔薇聖斗」「狭山事件」「左翼・右翼・過激派」「三億円事件」「死刑・死刑囚」「事件ダイジェスト・オムニバス」「事件ルポ・犯罪小説」「事故・災害」「自殺問題」「下山・三鷹・松川事件」「宗教」「少年犯罪」「昭和史・戦後史」「精神病・精神鑑定」「生と死」「帝銀事件」「テロ」「同和問題」「犯罪エッセイ・対談・評論」「犯罪学」「犯罪者の手記」「犯罪心理学」「犯罪白書」「犯罪被害者」「法医学」「未解決事件」「宮崎勤」「やくざ・暴力団」「薬物・毒物」などを共に事件を位置づけている。<http：//yabusaka.moo.jp/sankou-janru.htm>。このようなページ他にも多数ある。

10 「金嬉老を狂気乱舞させた韓国版バイアグラ」(ワイド（続）真っ青な噂ヒドい噂)『週刊新潮』第 45 巻 36 号 (2000 年 9 月)、新潮社、p.51；「独占告白 金嬉老・71 歳『私を勃たせた "韓国版バイアグラ" の威力』」『週刊現代』第 42 巻 4 号（2000 年 1 月）、講談社、pp.48-50、「韓国版バイアグラの広告塔になる「金嬉老」の頑張り（ワイド特集 本誌〔週刊新潮〕「半世紀」を飾った主役の格付け 第 2 部)」『週刊新潮』第 45 巻 14 号（2000 年 4 月)、新潮社、p.54

11 確かに、性的エネルギーや男性生（masculinity）という要素は、当初から事件の理解において重要な要素であったと思われる。メディアを通じて伝えられた深い山中で単独で武装して数多くの警察と対立する孤独な男、死を決心した反英雄のイメージ、とりわけ新聞に載せられた写真は、極めて劇的でロマンティックなものであった。こうした権力に逆らう「大犯罪者」「反乱者」「革命家」の魅力やその英雄化が文化的専有に働きかけるメカニズムをさらに分析するためには、メディア・テキストにおけるレトリック（説得)、ポエティック（快感)、エロティック（誘惑）なものの複合的な作用（Silverstone 1999=2003）が顧慮されなければならない。

12 「유인촌의 전쟁…누구를 위한 것인가?」『프레시안』(2009 年 6 月 9 日）<http：//member.pressian.com/article/article.asp?article_num=60090609112159&section=03>

13 ブログ記事「재일교포 차별에 저항했던 권희로 , 그리고 병맛 유인촌」(「在日同胞差別に抵抗したクォンヒロ、そしてバカ柳仁村）<http：//ask.nate.com/knote/view.html?num=1306202> など

14 代表的なものとして「ネイト」(www.nate.com）やコミュニティサイト「dc inside」(dcinside.com）などがある。

15 「力石徹の死、よど号ハイジャック、金嬉老事件……『あしたのジョー』とあの時代」『中央公論』第 126 巻 3 号（2011 年 3 月)、中央公論新社、pp.104-113.

16 「空前の大アンケート 証言「日本の黄金時代 1964-74」– 各界著名人 332 名 衝撃の記憶」『文芸春秋』第 81 巻 11 号（2003 年 9 月)、文芸春秋、pp.289-297.

17 「金嬉老事件から 37 年 ふじみや旅館が売り出す『籠城鍋』（ワイド大特集　戦後 60 年重大事件の目撃者 私は現場にいた!）」『週刊文春』第 47 巻 31 号（2005 年 8 月)、文藝春秋、p.190.

18 旅館のおかみは、金の死亡後「「記憶が風化する」「残した方がいい」という周囲の声に押され資料館のオープンに踏み切った」という。旅館 1 階の広間の棚と壁に、当時の新聞記事や写真など関連資料 200 点以上を展示している。入場料は 500 円。(「金嬉老事件の現場に資料館　風化懸念し旅館おかみ公開」<http：//www.47news.jp/CN/201005/CN2010050801000454.html>。

19 番組のホーム・ページに設けられた視聴者意見欄には、異例的な数の反響と共感の投稿が載せられたが、そのなかには事件当時を体験してない 20 ～ 30 代からの書き込みも多数あった。<http：//www.tv-asahi.co.jp/d-sengen/opinion.html>

20 伸淑玉「佐高信の日本国憲法の逆襲　第二回」『世界』第 671 号（2000 年 2 月)、岩波書店、p.32.

21 姜尚中『毎日新聞』(1999 年 9 月 7 日）

22 近年、1960 年代や 1968 年に関する出版や学術イベントが著しく増えている。図書としては、スガ（2006)、小熊（2009a、2009b)、高原（2009)、毎日新聞社編（2009)、四方田・平沢（2010)、三橋（2010)、加納・加納（2010）など、シンポジウムとしては、「1968 年と 2009 年」(2009 年 11 月 1 日、明治学院大学 国際学部付属研究所主催)、「反乱する若者たち―― 1960 年代以降の運動・文化」(2010 年 1 月 8 日～ 11 日、名古屋大学大学院文学研究科附属日本近現代文化研究センター主催）などが代表的である。

[23] 代表的組織としては、「在日特権を許さない市民の会」（在特会）、「NPO 外国人犯罪追放運動」「外国人参政権に反対する会」「主権回復を目指す会」（主権会）、日本を護る市民の会（日護会）、「千風の会」などがある（「“市民の顔した右翼の時代”の到来か、市民団体化する右派勢力」『日刊ベリタ』2009 年 2 月 23 日 <http：//www.nikkanberita.com/read.cgi?id=200902231138491>。

[24] 毎日新聞 2010 年 2 月 27 日

[25] 集会の告知：<http：//www.zaitokukai.info/modules/piCal/index.php?action=View&event_id=0000000227>、活動報告：<http：//www.zaitokukai.info/modules/news/article.php?storyid=350>。「在日特権を許さない市民の会」、通称「在特会」は、公式ホームページの情報によれば、全国支部の会員は、2012 年 1 月現在 11107 人（男性 9457 人、女性 1645 人）に及ぶ。活動のネット配信に注力しており、「Yahoo ！」や「google」などの主要検索エンジンで、100 万件以上の関連動画が検索される。「Youtube」だけで 500 件以上の活動報告映像がアップロードされている。

[26] 関連 web ページ：<http：//81.xmbs.jp/piroshigogo-208231-ch.php?guid=on>
「2 ちゃんねる」の関連掲示板：<http：//tsushima.2ch.net/test/read.cgi/news/1267275016/l50>
「【在特会】緊急生放送！ 金嬉老の再入国断固反対 in 法務省前」<http：//live.nicovideo.jp/watch/lv12445260>

[27] 政治体における「非市民」「外部者」「他者」の位相にかんする議論としては、他者を公共性へ包容していく熟議民主主義的構想（Habermas）、政治的境界線の開放に向けられた「民主的反復」（Benhabib 2004=2006）、普遍性をめぐる永遠なヘゲモニー闘争のラジカル民主主義（Laclau, Mouffe 1985）といったモデルがある。一方、これらのモデルにみられる漸進的な運動、永続的な反復の形式性については異論がある。たとえば、Charterjee（1993）は、インドにおける西洋近代思想の民族主義・脱植民主義的な専有を分析しながら、ポスト・コロニアルな社会の歴史が、ヨーロッパ的近代性の軌跡を沿わず、「crooked line」としてしかとらえられないことを示している。これは、日本の戦後市民権史を考えるうえで重要な意義を持つと思われる。

※本稿で参考した Web サイトの最終アクセス日は、2012 年 1 月 19 日である。

参考文献

Benhabib, Seyla, 2004, *The Rights of Others*, Cambridge University Press.（＝2006　向山恭一訳『他者の権利―外国人・居留民・市民』法政大学出版局.）

Borradori, Giovanna, Derrida, Jacques, Habermas, Jurgen, 2003, *Philosophy in a Time of Terror*：*Dialogues With J. Habermas and J. Derrida*, Chicago：University Of Chicago Press.（＝2004 藤本一勇・深里岳史訳『テロルの時代と哲学の使命』岩波書店.）

Butler, Judith, 1993, *Bodies That Matter*：*On the Discursive Limits of Sex*, London：Routledge.

Chatterjee, Partha, 1993, *Nationalist thought and the colonial world*, London：Zed Books.

鄭大均　2004『在日・強制連行の神話』（文春新書）文藝春秋。

Derrida, Jacques [1972] 1999 “Signature Event Context,” in Peggy Kamuf（ed.）*A Derrida Reader*：*Between the Blinds*, New York：Columbia University Press, pp.80–111.

遠藤薫　2004『インターネットと＜世論＞形成』東京電機大学出版局。

Giddens Anthony, 1985, *The Nation-State and Violence*, Cambridge：Polity.（=1999 松尾精文・小幡正敏訳『国民国家と暴力』 而立書房.）

岳真也　2008『書き込み式 自分史サブノート』（祥伝社新書） 祥伝社。

Harvey, David, 1979, “Monument and Myth,” *Annals of the Association of American Geographers*, 69（3）, pp.362-381.

本田靖春　1982『私戦』講談社。

福永良子　2005『脳と心が若返る昭和なつかしクロスワード』草思社。

加納明弘・加納建太　2010『お前の1960年代を、死ぬ前にしゃべっとけ』ポット出版。

加藤千香子　2010「1970年代日本の「民族差別」をめぐる運動―「日立闘争」を中心に」『人民の歴史学』（東京歴史科学研究会）185号、pp.13-24。

Kearney, Richard, 2002, Gods and Monsters：Interpreting Otherness, London：Routledge.

金嬉老　1999『われ生きたり』新潮社。

金嬉老公判対策委員会 1982『金嬉老問題資料集成』むくげ舎。

北田暁大　2005『嗤う日本の「ナショナリズム」』日本放送出版協会。

Kristeva, Julia, 1982, *Powers of Horror*：*An Essay on Abjection,* （trans. Leon S. Roudiez）, New York：Columbia University Press.
Laclau, Ernesto, Mouffe, Chantal, 1985, *Hegemony and Socialist Strategy*：*towards a radical democratic politics*, London and New York：Verso.
Lull, James, 2000, *Media, Communication, Culture*：*A global approach, Cambridge*：Polity.
毎日新聞社編　2009『1968年に日本と世界で起こったこと』毎日新聞社。
三橋俊明　2010『路上の全共闘1968』河出書房新社。
Morris-Suzuki, Tessa, 2004, *The Past within Us*：*Media, Memory, History*, New York：W. W. Norton & Company.（=2004, 田代泰子訳『過去は死なない――メディア・記憶・歴史』岩波書店.）
小熊英二　2009a『1968〈上〉若者たちの叛乱とその背景』新曜社。
_____　2009b『1968〈下〉叛乱の終焉とその遺産』新曜社。
Sanders, Julie, 2005, *Adaptation and Appropriation*, London：Routledge.
歴史の謎を探る会編　2006『常識として知っておきたい昭和の重大事件』（KAWADE夢文庫） 河出書房新社。
新人物往来社編　2010『懐かしい [昭和] のニュース手帖』 （新人物文庫 し 1-7） 新人物往来社。
Silverstone, Roger, 1999, *Why study the media?*, London; Thousand Oaks, Calif.：Sage. （=2003吉見俊哉・伊藤守・土橋臣吾訳『なぜメディア研究か―経験・テクスト・他者』せりか書房.）
Spivak, Gayatri Chakravorty, Butler, Judith, 2007, *Who Sings the Nation-State?*：*Language, Politics*, Belonging, Oxford：Seagull Books.
スガ秀実　2006『1968年』（ちくま新書）筑摩書房。
鈴木謙介　2005『カーニヴァル化する社会』講談社。
鈴木道彦　2007『越境の時--一九六〇年代と在日』集英社。
高橋順一　2009『1968年 の世界史』藤原書店。
高原基彰　2006『不安型ナショナリズムの時代―日韓中のネット世代が憎みあう本当の理由』洋泉社。
Tomlinson, John, 1991, Cultural Imperialism：A Critical Introduction, London：Pinte.
山本リエ　1982『金嬉老とオモニ』創樹社。
四方田犬彦・平沢剛　2010『1968年文化論』毎日新聞社。
吉見俊哉・水越伸　2001『改訂版　メディア論』放送大学教育振興会。

鄭　鎬碩（じょん　ほそく）
1976年韓国ソウル市生まれ
［**専攻領域**］社会情報学（メディア／文化研究、市民権論）
［**著書・論文**］
「貧者の想像――アントニオ・ネグリにおける「想像」をめぐって――」『思想』2009年第８号（No.1024）、岩波書店
［**所属**］東京大学大学院情報学環特任助教
［**所属学会**］日本マス・コミュニケーション学会、日本社会学会

Kim's War without End: On Recent Cultural Appropriations of *Kimhiro Incident*

Hoseok Jeong*

Abstract

This paper explores the recent mediascape of the cultural appropriation of *Kimhiro Incident*.

In 1968, Kim Hiro, a second generation *Zainichi* (Korean residents in Japan), charged Japanese society with the ethnic discrimination he suffered by staging a "hostage" situation. As his 88-hour standoff with police lodged into the intensive media spotlight, the long-forgotten problem of *Zainichi* gained a larger audience than any prior.

Focusing on how this historical event is multifariously mediated and reinterpreted since 2000, this article examines how a socio-political meaning of a past event is reproduced or transformed afterward.

In a number of recent uses, *Kimhiro* Incident tends to be an abstract symbol of anti-power struggle, as losing its postcolonial context. Examples are the DVDs and magazine articles, which relocate *Kimhiro* among subcultural commodities related to *Urashakai* (the dark side of a society) such as crimes, *yakuza* and even *viagra*.

Meanwhile, in its reinterpretation in South Korea, Kim Hiro's persona as an insurgent is reinvented as an effective tool of political parody on web.

While conspicuous are recent trends such as a nostalgic appropriation, which reduces personal media experiences of the incident to a shared memory of *showa* period, a chauvinistic citations, an amount of which are found in internet discourse, there are also activities of re-problematization and re-appreciation of the historical event with regards to a *Minzoku Mondai* (ethnic issues).

As shown in the irreducible potentialities of cultural politics in the endless appropriation, *Kimhiro* Incident proves itself to be a critical case when we inquire into the cultural

* Interfaculty Initiative in Information Studies, the University of Tokyo

Key Words: *kimhiro incident*, cultural appropriation, social mediation, anti-power struggle, *Showa* retro boom, *MinzokuMondai* (ethnic issues).

mechanism through which non-citizens or aliens appear to be meaningful agents of the historical transformation of citizenship in postwar Japan.